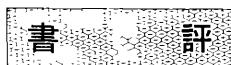


Title	中村勝己編 受容と変容：日本近代の経済と思想
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No.1 (1990. 4) ,p.206- 210
JaLC DOI	10.14991/001.19900401-0206
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900401-0206">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900401-0206</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



中村勝己編

『受容と変容——日本近代の  
経済と思想』

（1989年、みずす書房、239頁、2,266円）

本書は、編者中村勝己氏が、「あとがき」で記しているように、1987年、慶應義塾福沢研究センター主催の「日本近代思想史研究の方法」と題する共通テーマの連続講演会において行われた五つの講演の速記に、修正加筆をほどこして収録したもので、その五つの講演は、つぎの諸教授によって、以下の題目で行われた。すなわち、編者、中村教授の「まえがき」につづけて、

1 「東洋の英国」と「東洋の土人部落」——北一輝の経済思想とファシズムへの道程……関口尚志

2 ナショナリズム——その歴史的背景と今日的意味について……山下幸夫

3 都市と西欧市民社会——ヴェーバー理論を手がかりとして……田中豊治

4 自由主義経済学を受容……杉原四郎

5 半世紀のリスト受容……小林昇

本書の内容をなす五篇の諸論稿は、編者中村氏が、「まえがき」で指摘しておられるように、わが国が西欧文明を受け入れるに当って「必ずや触れざるをえない基本課題」を背負って格闘した人物とその思想をとり上げたものであり、北一輝の思想の解明を通じてファシズムを、そしてそれとの密接な関連をもつナショナリズムの問題をはじめとして、また西欧市民社会を生み出したヨーロッパの都市形成の基盤を論ずるヴェーバーの解明によって、現実のわが国巨大都市が、健全な市民意識を育てることができな

かった所以を示唆する都市の論理を紹介し、最後に、わが国への西欧経済学導入をあつかう二つの論文によってしめくくっている。これらの諸論文相互の間には、必ずしも密接な問題関心の連環があるわけではない。しかしわが国が、高度に発展した資本主義国であるにもかかわらず、西欧にみるような強烈な市民意識を内に秘めた市民社会の成熟を感じさせることはできない。北一輝の言う「東洋の土人部落」という現象は、これを指しているのではなからうか。

二・二六事件において、日本右翼運動の理論的指導者として、この事件の黒幕的存在であった北一輝は、日本思想史上、まことに特異な人物であった。河上肇は、明治39年8月21日付、『讀賣新聞』紙上に、「純正社会主義の哲学を讀む」と題する論文を載せ、つぎのように評価している。

『純正社会主義の哲学』は、北輝次郎氏の新著也、氏は今年の五月、『国体論及純正社会主義』といへる一千頁余の著述を公にせしが、書中、論の皇室に及べるものありし為めとかにて、出版後直ちに発売を禁止されたり、今回公にされたるは前著中の或る一編を訂正したるものなり。

この河上の著書に展開された社会主義の理論は、「生物進化論より説明せる社会進化の理法及び理想」という副題から察せられるように、生物進化の法則を社会進化の歴史に適用した点について、つぎのように高く評価している。

しかるに今、本書の著者が、其の著書の少からざる部分を、社会進化の理想の研究に献げたるは、其の研究の成否と失敗と、完全と不備とを問はず、余の最も愉快とする所也、乍併「社会進化の将来」に就いては、「其の余りに独創の断案の爲めに……著者の科学的謹慎に疑を挟む者なかるべしとせず」とは著者の自序せし所なるが、凡ての方面に於て冒険心に乏しき我が学界の事なれば、余も固より然るべしと信ず、<sup>さほ</sup>遮<sup>あ</sup>莫余は少からざる興味を以て之を讀みたり。

ただ河上は、北の思想について、「其の宗教乃至民主社会主義に関する意見に至りては、異論ある所も少からず」と考え、この書を社会民主主義と分離して、単に生物進化の理法と理想を説明せるもの」としてみた場合には、もっとも興味深いものがあるであろうとしている。

明治三九年といえ、河上の文名を一時に高めることになり、社会思想家としての彼の地位を確立したといわれる『社会主義評論』が、千山万水楼主人の名によって、『読売新聞』から発刊された年で、若き日の北の思想に宿るファシズムを感じることではできなかったと思われる。後に河上肇は、京大教授を辞し、日本共産党に入党、マルクス主義の理論を實踐すべく一党员として奮闘するが、昭和八年一月、検挙された。翌九年十一月、吉村検事が、河上の思想状況を訊ねる過程で、ファシズムについての河上の思想を、つぎのように<sup>ただ</sup>糺している。

問 社会ファシズムに共鳴する点はありませんか？ 謂わゆる社会ファシストの連中と手を取り合うことは出来ないものでしょうか？ 二・二六事件をどう思いますか？ あの事件の思想的背景には社会主義的な主張があり、随分革命的な傾向もあると考えられるが、あなたはそれをどう思ひますか？

この問いにたいする河上の答えは、きわめて興味深い。

答 どうも社会ファシストと手を握る訳には参りません。彼等がたとい社会主義的言辭を弄する場合があるにしても、それはみな口先だけのことでしょう。中には本気で資本主義の打倒を志している者もないとは限りませんが、そうした本人自身の主観的意志は少しも問題ではなく、それは彼等が客観的に反動主義者であることに何の影響もありません。

つぎの一節は、ファシズムの本質を衝いており、思想家を犯罪者扱いする国家権力の執行者検事にたいする有効な反論ともいふべきであら

う。

思い切って早く手術しなければならぬという病人の状態であるのに、不動様の護符なんかを持ち出して来て、必要な科学的治療法に反対する者があれば、当人は如何に親切な意図で振舞って居るにしろ、客観的には病人を殺そうとして居るのだから、私達は極力反対せざるを得ません。なまじいに病気をなおすなどという看板をかけているために、人を迷わす害が大きいのです。私はそんなものと一緒になる訳には行きません（河上肇『自叙伝』(四)岩波文庫、244—245）。

しかし注目すべきは、つぎの北一輝についての評価であろう。

私は二・二六事件の思想的背景がどんなものか、少しも知って居ません。北一輝の非合法的著作なるものの内容も、私は一行も見たことはありません。お話によって想像すると、それには大分、「革命的」な言辭が弄してあるらしい様子ですが、しかしそれには同時に、真実の革命を不可能ならしめる要素が条件付きに織り込まれているに相違ありません。彼等の執った手段が非合法的だという点、たゞ、その点だけが外形上吾々と似ているだけで、他に共通の点は皆無だと云っても可いでしょう。

だが、河上の北一輝にたいする忌憚ない批判は、ファシズムを鋭く分析するつぎの一節に明らかである。

ファシズムには統一された思想がない代りに、その主張には、矛盾した色々な思想体系の断片破片が、ぼろきれのように継ぎ合わされています。それらの中には、北一輝の著書にあるとか云うような、社会主義的、反資本主義的、革命的デマゴギーも交ざって居ることでしょう。それは、小ブルジョア及び後れた層のプロレタリアを引寄せするために必要な薬味の

一つであるに相違ありません(上掲, 自叙伝, 248頁)。

関口尚志氏は、「家父長国(君主主権の家産制国家)から「公民国家」(国家主権の市民社会)へ、忠君から愛国へという脱皮を説き、アジア的・復古的な家産思想に衝撃を与えた北一輝の思想は、その超国家主義の故に、結局、帝国主義国家への途を賛美する弱肉強食の生存の論理へ飛躍したとしている(38頁)。旧来の天皇制と日本社会の伝統的な家族制度にたいして、深い分析のメスがファシスト北一輝によって加えられたとすれば、それは、日本人としては、珍しく独自の個の自覚を促した試みであるが、しかし果して北は、著者の云うように、日本のパリア資本主義の基底を成す共同体意識を否定するものであったのだろうか。「自分以外、自社以外、自国以外のよそ者に対する配慮」の欠如は、むしろ河上の云うように、ファシズムの本質であり、その意味では、現在のわが社会を根元的に規定する企業主義こそ、一種、ファシズムに通ずるものではなからうか。それとも北一輝のファシズムは、そうした企業主義を克服しうる何かを、今日のわれわれに提示しているのであろうか。困難な問題である。

さて、今日、われわれが、基本的人間の擁護を問題にする場合、国家権力あるいは国家がその圧迫者、あるいはこれを蹂躪するものとして意識されることは少なくなった。むしろ、これに代って企業が、人民の自由や権利の前に対峙し、これらを脅かす存在となっているのではなからうか。山下幸男氏は、明瞭にはのべておられないけれども、「日本が今日抱えている最大の問題は、一人当たりGNPのという経済的な指標の高さが、必ずしも人びとの幸せにつながっていないこと」、「たとえ名目賃金は高くても、国際慣行をはるかに上回る長時間労働は、単位時間当たり実質賃金の水準を大幅に引き下げているのであり、それによって、健康な国民生活がはなはだしく損われている」とされる。かつて国家を主体とした日本のナショナルリズムはいま

や企業によって代表され、人権を奪っている。その意味からすると、現代、繁栄を謳歌するかにみえる日本経済は、ネオ・ファシズム、むしろ「企業ファシズムの時代」とも云える恐ろしい段階に突入したのではなからうか。その象徴となっているのが巨大都市であり、本来「市民生活の砦」として成長した歴史をもつ都市は、すべてのものを呑み込むマンモスの怪物として現われつつある。その点で、田中豊治教授の論稿「都市と西欧市民社会」は、きわめて示唆的である。

私はかつて、ある外国の友人を京都に案内したとき、「古い歴史をもつこの千年の都は、街全体がさぞ高い城壁によって囲まれ、現在、その全部が残っていないにしても、その遺跡は保存されているのではないか」というようなことを訊ねられたことがあった。どのような返答をしたか、古い話なので忘れてしまったが、何でも、どう答えてよいか当惑し、返事に窮したことだけは覚えている。おそらく彼は、ヨーロッパ的な感覚からして、アジアの都市も、たとえば北京にみる如く、土塀が築かれ、それによって市民生活が外界から隔てられているというように想像したのであろう。

日本史に暗い筆者は、平安の昔、王城の地が外部からの侵入を防止するため、保塁や城砦によって防備されていたかどうかは知らないが、一般的に日本の都市は、城下町の場合でも、城や寺院などを中心にその規模を、あるいは円形に、あるいは放射状に拡大し、郊外へ外延的に拡がっていくという傾向であった。つまりとめどもなく、都市の空間が拡がってゆき、これを遮る何物も存在しないという現象で、これをもっとも典型的に象徴するのが、わが日本の首都東京である。

著者の説くヴェーバーの近代的市民によって形づくられた都市というのは、そのひとつの特徴として、「小工業従事者を中心とする勤労的な民衆の居住空間」(119頁)であることである。しかも「商工業を中心とした小営業市民という

のは、社会のなかでは持てる階層つまり上流階層ではない」ということである。このような観点からすると、わが国の都市はいま重大な危機に見舞われ、その存立の基礎が脅かされているのではなかろうか。すなわち、小商人や小手工業者、自営業者や職人、都市の住民を構成するこれらの階層は、いま深刻な後継者難に喘いでいるといっても過言ではない。大学を出た息子や娘たちは後を継がず、企業に入り、いわゆるサラリーマンになる。娘たちも企業に籍をもつ勤め人を結婚の対象と考えるけれども、自営業者の妻になることを拒否する。農村を襲いつつある深刻な嫁不足が、いまや都市住民を直撃し、下町の崩壊を早め、都会の空洞化を目前のものとしている。ここにも企業社会の齟齬救いがたい病根がはびこりつつある。しかしこのような現象は、果してわが国特有のものか、それともヨーロッパの諸都市をも危殆におとしめている現象なのだろうか。筆者はこの点について田中教授の御教授を乞いたいと念願する。筆者は、日本における西欧経済学の導入には非常に関心をもっているひとりであるが、杉原教授は、この西欧経済学受容についてきわめて詳細且つ実証的に、「自由主義経済学の受容」と題する論文のなかで論じられ、つぎのようないくつかの問題点を示唆されている。

まず第一に、杉原氏は、明治十四年の政変を契機として、「それまでの方針が一変し、わが国の模範国がドイツとなった。……こうしてドイツを模範とする近代化路線の上に日本の近代化路線が布かれ日本の近代国家体制、あるいは社会経済体制というものがつくり上げられ、その思想的基軸がドイツ的な社会科学体系であり経済学であった」（本書142頁）。そしてそれ以後英仏流の自由主義経済思想は、ほとんど全く顧みられなくなった、というのが従来定説となっており、教授はこの定説に批判的であることがのべられている。

明治政治史上、この十四年の政変が決定的に重要な事件で、大隈重信の失脚とこれに伴う福

沢門下生の官署政庁からの追放が、日本の近代国家成立にあたって強烈なインパクトをあたえたことはよく知られている。その後、伊藤博文は、明治十五年三月、憲法制定のための取調べのためにドイツに出張、その結果は、二二年、帝国憲法の発布となり、翌二三年には教育勅語の渙発、そしてその間、明治十八年には東京大学令の整備というように、いわゆる明治絶対主義政権の基礎が形づくられ、その過程で、自由党の解体に象徴されるように、英米流の民主主義が否定されたということは通説となっている。しかし経済思想がこれとどのように絡み合っていたかという点、明治十四年の段階でドイツ的な影響がイギリス的な自由主義経済学を凌いだ、という杉原教授の通説の理解は、必ずしも正しくないと思う。むしろフランス法からドイツ法への転換にみられるように、法学部門、従って法制的な側面で急激な転換がみられたのではなかろうか。歴史学派に代表されるドイツ経済学の導入は、明治二十年代からのことで、明治十四年の政変と直接かかわりはないと思う。政治過程の進行とは一応独立に、さまざまな経済思想が、この時期、導入され、教養として受容されてきたという杉原氏の御意見は妥当である。

つぎに注目すべき問題点の指摘は、「江戸時代の経済思想やその土壌としての経済社会状態と、明治以後のそれとの関係についてどう考えるか、両者の間の質的転換、飛躍、断絶を見るか、あるいは連続的發展・継承関係ありと見るか」（146頁）ということであるが、著者は、従来は非連続説が有力であったが、最近における計量史学の発達の影響もあり、「近世と近代とは経済的にはむしろ連続的にとらえられるべきだ」という見解が有力」（147頁）というようにのべられ、前者の代表として河野健二氏、後者を代表する者として逆井孝仁教授をあげておられる。筆者は、この問題は結局、日本における封建制の問題にかかっていると考える。すなわち、市民革命や市民社会が、わが国の場合、どのようにしておこり、あるいはどのようにして

存在したかということを中心に、この問題を衝くことなしには深い議論にはなりえないと思う。しかし、杉原教授の御論稿は、きわめて示唆的で多くの点で読者に裨益するところまことに大きい。最後に、小林昇教授の「半世紀のリスト」に移ろう。

「半世紀のリスト受容」を読み、また直接、このお話をきいて、太平洋戦争勃発前後に経済学の研究に志し、敗戦後、研究生活に入った者として、筆者はフリードリヒ・リストに、アダム・スミスとともに忘れがたい感慨を抱いたことを記憶している。何よりも、大河内一男教授の『スミスとリスト』、高島善哉教授の『経済社会学の根本問題』、この二冊の書物をはじめて読んだのは、満十九歳の頃であったから、高島さんのいわれる経済社会学や、大河内さんの「生産力論」という概念が、はっきり把握できたかどうか、自信はなかったが、ともかく幸運なスミスとリストの実に悲劇的な生涯その対比に驚くとともに、当時のわが国のおかれた状況からして、その経済発展段階説とともに、親近感を感じたものである。

勿論、筆者のリスト認識は、小林教授の御研究やフェビウンケのリスト研究あるいは住谷一彦氏の『リストとウェーバー』などによって深められたもので、とくにその『農地制度論』の重要性については、小林教授の邦訳が出版されるまで気がつかなかった。だが、社会政策学者としての筆者の関心は、彼がスミスの自由主義経済学にたいして国民経済学を対置した結果、政策学の提唱者であり、ドイツ歴史学派の創始者であるということで、価値論を欠如した経済学体系であることにも興味をひかれたものである。

筆者は、日本が、資本主義発達の歴史的状況からして、後発国であるという点でドイツに酷似している点からすれば、リストの理論は、よりよくわが国に適応的であると考え。しかしそれにもかかわらず、われわれは、ひとりのスミスも、ひとりのリストも生み出すことはでき

なかった。経済的にみて、世界をリードする程、日本が強力となった今日、われわれはこの点に想いを致すべき時にきているのではなからうか。その意味で、最後に、小林昇教授が「半世紀のリスト受容」のなかで、結論的にのべておられるつぎの一節は示唆的であろう。私はこの問題について幸いに、教授の御教示をえたが（最後の「質疑応答」を参照されたい）、読者にもこれを問題として考察すべき事柄として訴えておきたいと思う。

日本独自の学史研究というものは当然あるべきだと私は考えます。これはドイツに限らずイギリスに対しても言えることです。たとえばイギリスではスコットランド啓蒙というテーマを一所懸命やっていますが、同じレベルや問題意識で日本人がそれをやる必要があるかどうかということは問題でしょう。私は、学史研究というものは究極は一種の文明批評じゃないかと思っております。

この点について筆者は非常に考えさせられたものである。

本書は、実にさまざまな視角から問題が提起され、とくに報告者との討論、質疑応答が有益である。編者中村教授の御苦心が窺われるところで、是非、多くの諸君の精読をお奨めしたい。

飯 田 鼎

(名誉教授)